

原 著

新潟県中越地震を経験して（第二報） ～被災者の服薬意識調査を実施して～

魚沼病院、薬剤部；薬剤師

やま ぎし あか り
山 岸 朱 理

目的：平成16年10月23日に当院の所在する新潟県小千谷市を襲った新潟県中越地震は、当院に通院する患者にも甚大な被害を及ぼした。第一報では医療従事者として振り返った。今回、被災者である、当院外来通院患者に被災時の服薬状況などについてアンケートを行い、振り返った。

方法：平成18年7月3日～8月11日の間、当院外来を受診し薬剤を交付された患者の中から無作為に抽出し、アンケートをもとに聞き取り調査を行った。

：回答者の多くが高齢者であるためか、被災者の中に「病院は大丈夫」と言う意識が根強くあるように感じた。また、被災後数日間薬を服用できなかつた方が多い中、服用できなかつたときの対処方法に認識不足と取れる回答が多く聞かれた。服薬という観点での「備え」は被災者の中には根付いていないようであった。

結論：今後、服薬意義を患者にしっかり理解していただき、医療従事者と患者との認識の温度差を縮めていく必要があると感じた。

キーワード：新潟県中越地震、服薬意識調査、情報の共有、農村地域の災害

緒 言

平成16年10月23日午後5時56分、震度6強の大きな揺れが当院の所在する新潟県小千谷市を襲った。当院に通院する患者のほとんどが、今回の地震の被災地である新潟県中越地方に居住しており、被災直後は避難生活を余儀なくされた。

また、当院の外来患者の年齢分布（図1）を見てもわかるように、当院周辺の地域は高齢化が進んでおり、その多くの高齢者が服薬による治療を行っていると思われる。

今回、当院外来患者にアンケートを行い、被災時の服薬状況、日頃の服薬意識、地震を被災しての服薬への意識の変化等を調査した。

対 象 と 方 法

アンケートの実施

実施期間：平成18年7月3日～8月11日

実施方法：当院外来患者で薬剤が交付され、新潟県

中越地震を被災した患者に対し、アンケート用紙を用い、聞き取り方式により行う。

患者の抽出は無作為であり、患者本人が理解困難な場合、患者家族に協力をもらい回答を得た。

結 果 と 考 察

1. 集計数
アンケート回収枚数：66枚（男性 33枚、女性 33枚）
年代別には、高齢者の回答が多くなった（図2）。
2. 被災時の服薬状況に関するアンケート結果
 - ① 普段お薬はどこに保管していますか？
食事をする場所を含む居間が一番多い回答となった（図3）。食前もしくは食後に忘れずに服用するために、居間に保管するという回答が多かった。保管には一つの場所に固定しているという回答が多く、中には2～3日分を財布やかばんに常備しているという回答もあった。
 - ② 被災直後、お薬は手元にありましたか？
約半数の方が薬を携えて避難をできたようだ（図4、表1）。
地震発生が夕食時ということもあり、薬を持って食卓についたため、薬を持って避難することができたという回答も聞かれた。
 - ③ 薬の服用を再開できたのは、被災後どのくらいたってからですか？
翌朝、避難場所から自宅へ戻り薬を手に入れ服薬を再開できたという回答が多く聞かれた（図5）。家財の下敷きになってしまったという回答や、地震による混乱により「薬を服用する」ということ自体を忘れてしまったという回答も聞かれた。
 - ④ 薬を服用しないことに不安を覚えませんでしたか？
半数以上の方（21名66%）が「不安ではなかった」と回答した（図6、表2）。
中には「家や家族のことが心配でそれどころではなかった」という回答が聞かれた。
 - ⑤ 被災後、現れた症状によりお薬に頼ることがありましたか？
「ある」と回答したのは15名（25%）と少数であった（図7、表3）が、その中でも最も多い症状が「不安や不眠」の6例であった。その他、怪

我による鎮痛剤の使用（3例）、めまい、下痢、息切れ、感冒症状、頻尿などがあつた。薬の入手は、当院を初めとする医療機関にかり処方されたものや、避難所に設営された診療施設による処方、家族から譲り受けたもの、薬剤師会による支援助資などが挙げられた。

また「なかった」と回答した患者の中にも、薬には頼らなかつたが不眠が続いたという回答も多く聞かれた。不眠の原因は、なれない避難所での精神的疲労や自宅の修復に関する不安、勤め先などの不安、など多種多様であつた。

3. 日常における服薬意識に関するアンケート結果

① 普段服用しているお薬の名前、服用方法を覚えていますか？

「覚えていない」と回答する患者が半数近く（26名45%）いた（図8、表4）。

多数の患者が、服用している薬に関してあまり興味・関心がないように感じた。

お薬手帳を携帯している患者は回答として得られたのは3名と少数であつた。

「覚えていない」と回答した患者の中に、「ここ（病院）にすればわかるから知らなくてもいい」と答える高齢者が多く見受けられた。当院では薬剤情報を短冊として、「薬品名」「規格」「薬効」を載せ添付しているが、高齢者に理解できているのかを今後見直す必要があるように感じた。

② 普段服用しているお薬を服用し損ねた場合、起こりうる症状や対処方法をご存知ですか？

服用している薬品に対する認識の程度を調べるために設けた質問であつたが、「あまりわかっていない」（6名11%）もしくは「知らない」（26名45%）と答えた患者が半数を超えた（図9、表5）。

今回聞き取りを行った患者の中にインスリンも含む糖尿病薬を服用している患者は11名いた。服用方法に注意が必要なこのような薬を服用している患者でも、「知らない」と4名（36%）が答えた。

③ ご家族や周囲の方はあなたが服用しているお薬のことをご存知ですか？

聞き取り調査を行った約七割が70歳以上の高齢者であり、聞き取りを行う中で「家の者に全部任せてあるから（自分が飲んでいる薬や自分の病気のこと）自分はわからない」と答える方が少なくなかつた（図10、表6）。

4. 被災者の声

今回聞き取りを行った患者の多くは、震災により日頃何気なく行っている些細な事に不自由を感じていた。聞き取り中に寄せられた言葉は、私たちにとって考えさせられるものであり、今後の備えに一役買うものであつた。

- ・近所の方で薬を自宅に置いてきて困っている方がいた。同じ薬だったので分けて欲しいと言われたが、薬は怖いので断つた。（60代女性）
- ・避難所生活中、不眠で悩んだが薬は飲まなかつた。集団生活でみんなが悩んで、困っていたので、小言はとて言えなかつた。（60代女性）
- ・地震があまりにおおごとで、体のことなんて考えられなかつた。（70代女性）
- ・普段服用している薬の名前を把握していれば近医もしくは避難所で同じような薬を処方してもらえ

た（50代女性 2～3週間服用できず症状悪化し入院）

- ・避難所にはボランティアの医師が常に見回っていてくれ、診察してもらい、健康への不安は和らいだ。（40代男性）
- ・不安を感じていないと言つたら嘘になる。努めて忘れよう、考えないようにしようとしていた。（70代男性）
- ・小さな音にもビクビクし、驚いてばかりで眠れない日が続いた。（70代女性）
- ・薬がなくなり病院を訪れた際、いつもと同じように薬をもらえて安心した（60代女性）
- ・薬も災害用に常備できるといいと思つた。（30代女性）
- ・地震後風邪を引いたが、病院を受診したくても混雑しており、受診できなかつた。家においてあつた薬で対処をした。（70代女性）
- ・車中生活が長くなり、足がむくみ触るとすぐ痛かつた。今まで経験したことがなかつた出の不安でならなかつた。（30代女性）
- ・インスリンの保管方法に困つた。（70代女性 1週間電気が途絶えた）
- ・一人暮らしで身寄りがなく、家財の下敷きになり、このまま孤独死になるのかなあと思つた。（70代女性）
- ・戦争に比べれば大したことじゃない。（80代男性）
- ・家族が何よりも「薬」。辛くても家族が無事で一緒にいられるのが何よりもよかつた。（70代女性）
- ・主治医にすべて任せてあるから心配ない（70代男性）

結 語

第一報で医療従事者として新潟県中越地震を振り返つた。病院として、薬剤師として災害に備える体制を整える必要性を強く感じた。

被災者の多くは、今回の地震を経験し日々の生活における「備え」について考え、実践していることと思う。

だが、服薬という観点での「備え」はどうだろうか。

被災者の中には「病院は大丈夫」という意識が根強くある。今回のアンケートを通して、服用している薬の名前や服用方法を問うと「ここ（病院）にすればわかる」という答えが多く聞かれた。幸いにして今回の震災では当院は大きな被害を免れ、数日にして病院としての機能を十分に果たすことができた。だが、それが何らかの原因で不可能になったとき患者の多くはパニックに陥るのではないだろうか。

医療機関では薬剤管理指導が行われ、インターネットや書籍により薬の情報を容易に手に入れられる昨今ではあるが、当院のような農村地域にある病院に通う高齢者にとってみれば、医療は病院任せ医師任せの受動的なものがほとんどであるように思える。

服薬意識という点では、被災後数日間薬を服用できなかった方が多い中、服用できなかったときの対処方法に認識不足と取れる回答が多く聞かれたのも問題として挙げられる。また各自の疾患を自分だけのものと捉えがちだが、治療には家族や周囲の協力も不可欠と

いえよう。自分に万が一のことがあった時、自分の命を委ねるのは周囲の者たちであるかもしれないということを仮定した「備え」が必要になってくる。

特に高齢者の服薬に関しては「情報の共有」が一つのキーワードとなってくる。お薬手帳を常に携帯すること。家族や周囲の方に自身の病気や服用している薬の情報を理解してもらうこと。窓口等で薬剤師と服用する薬の情報を確認することなどの対策が挙げられる。

また、私たち医療従事者としても日常の薬剤管理指導業務において、患者自身に服薬意識をより高める指導を行うべきだとも感じた。服薬意義をしっかりと理解していただき、医療従事者と患者との認識の温度差を縮めていく必要があると感じた。

英文抄録

Original article

Investigation of consciousness about taking medicine just after the Mid Niigata Prefecture Earthquake in 2004, the second report

Unonuma Hospital, Department of pharmacy; Pharmacist Akari Yamagishi

Objective : On the view point of patients, the medical circumstances just after a disaster in farm villages were investigated.

Study design : A questionnaire investigation was done to a random sampling of the outpatients who had been prescribed medicines between July 3 and August 11.

Results : There were a lot of issues to contend with drug withdrawals because patients had no preparation for a poor daily medical habit in a disaster.

Conclusion : We led patients to understand the significance of taking medicine well and to remove the gap in perception between medical workers and patients.

Key words : the Mid Niigata Prefecture Earthquake in 2004, investigation of consciousness of taking medicine, shared information, disaster in farm villages

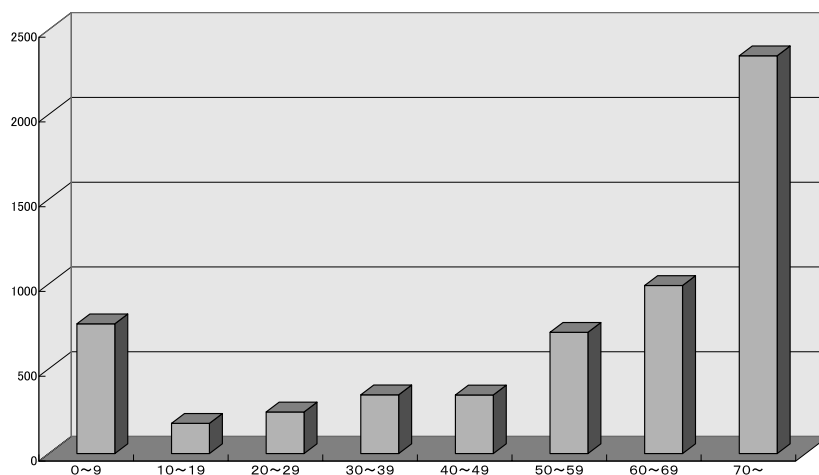


図1. 平成18年6月年齢別患者数

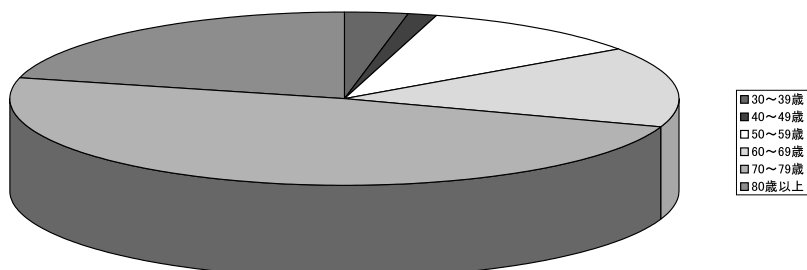


図2. アンケート集計 年代別

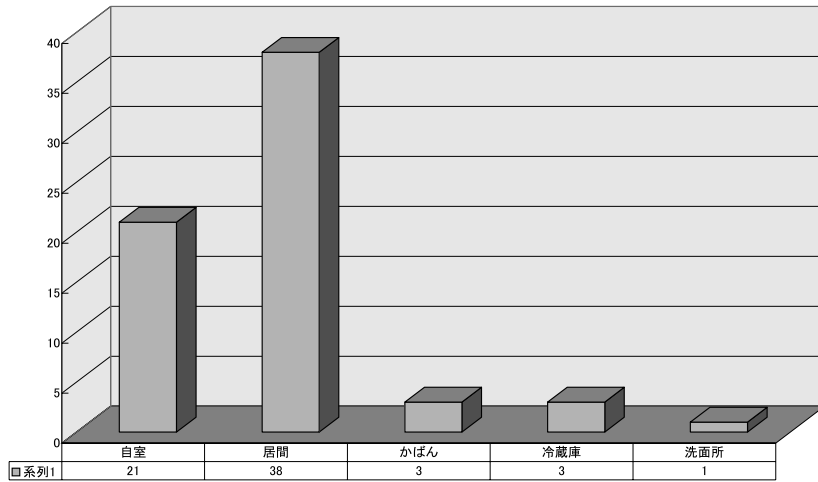


図3. 普段お薬はどこに保管していますか？

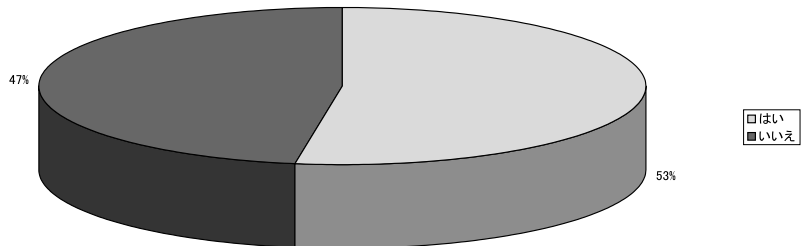


図4. 被災直後、お薬は手元にありましたか？

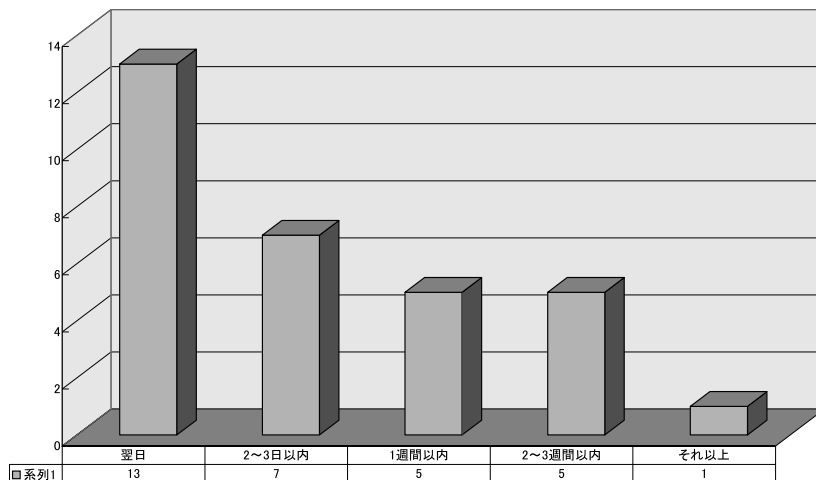


図5. 薬の服用を再開できたのは、被災後どのくらいたってからですか？

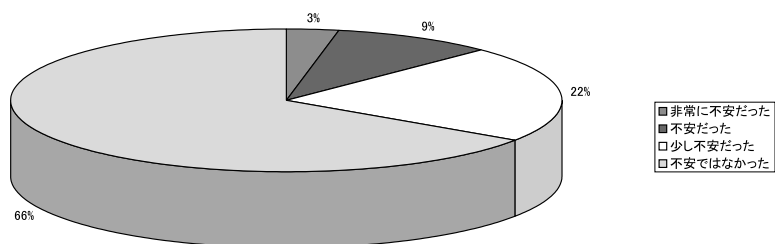


図6. 薬を服用しないことに不安を覚えませんでしたか？

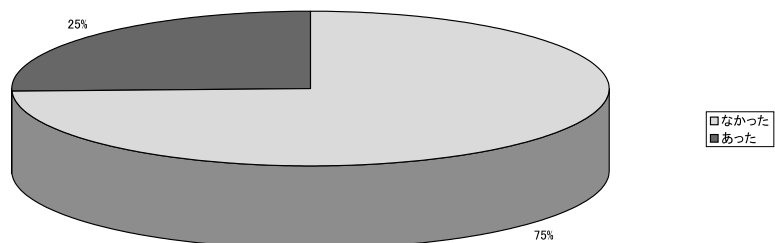


図7. 被災後、現れた症状によりお薬に頼ることがありましたか？

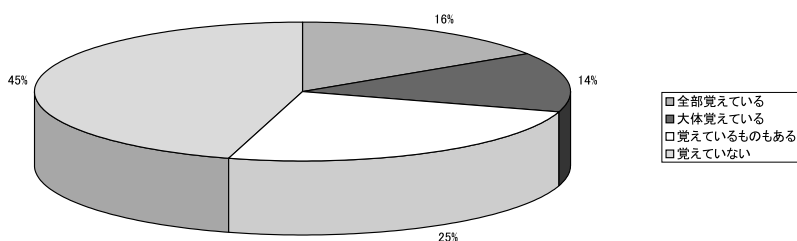


図8. 普段服用しているお薬の名前、服用方法を覚えていますか？

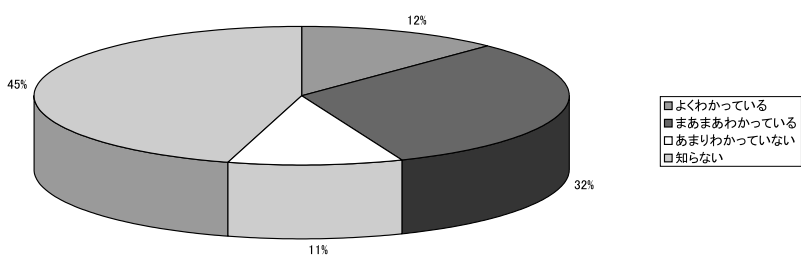


図9. 普段服用しているお薬を服用し損ねた場合、起こりうる症状や対処方法をご存知ですか？

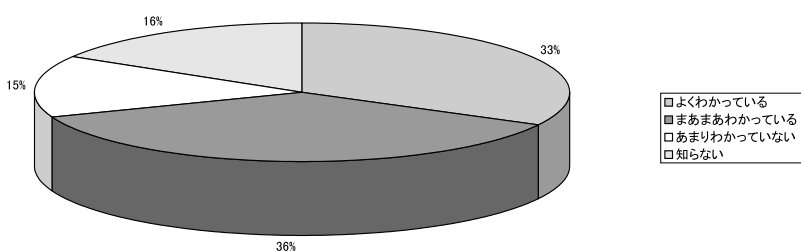


図10. ご家族や周囲の方はあなたが服用しているお薬のことをご存知ですか？

表 1. 被災直後、お薬は手元にありましたか？

はい	30
いいえ	27

表 2. 薬を服用しないことに不安を覚えませんでしたか？

非常に不安だった	1(3%)
不安だった	3(9%)
少し不安だった	7(22%)
不安ではなかった	21(66%)

表 3. 被災後、現れた症状によりお薬に頼ることがありましたか？

なかった	44(75%)
あった	15(25%)

表 4. 普段服用しているお薬の名前、服用方法を覚えていますか？

全部覚えている	9(16%)
大体覚えている	8(14%)
覚えているものもある	14(25%)
覚えていない	26(45%)

表 5. 普段服用しているお薬を服用し損ねた場合、起こりうる症状や対処方法をご存知ですか？

よくわかっている	7(12%)
まあまあわかっている	18(32%)
あまりわかっていない	6(11%)
知らない	26(45%)

表 6. ご家族や周囲の方はあなたが服用しているお薬のことをご存知ですか？

よくわかっている	18(33%)
まあまあわかっている	20(36%)
あまりわかっていない	8(15%)
知らない	9(16%)

(2006/12/07 受付、英文抄録文責 編集部)